

烏森トレッキング回想記

第九回

日時：'02. 11. 2 (土) ~ 11. 3 (日)

概略行程：

1日目 奥多摩駅～(森林浴コース)～氷川キャンプ場(飯盒炊さん)～梅久保～(おくたまむかしみち/いろは楓、境橋、さいかち木)～奥多摩駅～御岳駅～御岳平～ 宿泊/登奈利荘

2日目 ～長尾平～大塚山(昼食)～御岳平～御岳駅

メンバー： 斎木、米本、山田、吉川、磯崎

春を見送り、約1年振りのトレッキング。

寒暖の変化が急であったことから、紅葉は早目とも聞かれ、苦心の日程調整するも、向かう車窓の青梅沿線は、なお緑が深く、早、時期尚早を知る。

ただ週始めの天気予報が外れ、一転、“大快晴”には大喜び。

予定のメンバーが、人賑わう早朝の奥多摩駅に集合。

小林、森、若手両氏の欠席は、会の運営に大きな痛手で、次回以降の日程計画に課題を残す。

駅前、「スーパー小川屋」で炊さん食材を求め、いつものように、溪流沿いの道、「森林浴コース」を氷川キャンプ場へ歩く。

氷川渓谷での野外料理は3回目。

河原のあちこちに煙が立ち、人は好日を捉えるに抜かりなしと感心し、溪流近くのいつもの場所に荷を降ろす。

本日のメニューは、会頭をコック長に、調理難易度をぐ～んと上げ、「十目飯し」に、「薩摩芋の味噌汁」。

身内のことながら後者は秀逸、前者は、水加減に若干の迷いがあったが、まずまずの出来映えと評価が一致、それが証拠に、多すぎるのではと懸念された五合の飯が無事完売。

【余談20】今回の当初メニュー計画は、「ソース焼きそば」+「味噌汁」であった。

しかし吉川氏から、「焼きそば」には「ビール」で、「味噌汁」と言うのはいかなものかとの指摘あり、別に「ガーリック・ライス」のリクエストを受けた。

しかしレシピを一読し、その複雑さからこれは無理と即断し、当メニューに変更した。

因みに、十目は「里芋」、「筍」、「牛蒡」、「人参」、「椎茸」、「竹輪」、「油揚げ」、「ジャコ

煮干し、「グリーンピース」、「三つ葉」である。

行動計画をまたまた変更。

“おくたまむかしみち”の行程前半1／3ウォーキングを、予定の逆歩きとし、梅久保から氷川／奥多摩駅へ下ることとする。

スタートは、目玉の一つで、わざわざ前回の訪問コースに重複させた、巨樹“いろは楓”の再訪から。

しかし、当然ながら、楓葉は青々とした繁りを見せ、色付く気配は一切無し。再度、“いつの日にか”と唇を噛みしめるが、**当然の結果が予想されながらに、何故に訪ねたかは何とも不思議で、どうにも不思議。**

その直後に、「不動の上滝」への道を、“なんとも凡庸すぎる”と切り捨て、境橋から橋詰へととんねる隧道近道を歩く功利的判断をしたから、いよいよ不思議。

それにつけても、メンバー諸氏の、何ごとにも動じることのない、この鷹揚さがどこからくるのか摩訶不思議！

「橋詰」バス停横の石段を北に上り返し、再び、“むかしみち”に戻る。

今回の“むかしみち”は、驚くばかりの賑わい振りで、擦れ違う人、先を急ぐ人、共に多く、かつての往来風景を彷彿させる。

ただ、秋彩色は所々に見られる程度で、紅葉を楽しむには今一つ。

奥多摩湖／小河内ダム建設時、資材運搬用に敷設された廃線軌道プレートガーター跡を見、マメ科の巨樹が立つ、「さいかちぎ槐木」の休憩所で小休止。

トイレ設備も付属し、さほど古いものとも思われないが、何故か蜘蛛の巣が張る。

奥多摩／氷川から歩き始め、最初の峠と云われるこの辺り、道は舗装路されて建ち並ぶ民家の造作も新しい。“むかしみち”を忘れ、“小さな旅”のメロディ浮かぶは、そのせいか。

“みち”は、再び尾根の巻道に入るが、右手の崖下樹間には、車が走る「新青梅街道」が見え隠れし、里との距離の近さを知る。

まもなく、山里のいづこからか、賑やかに流れ来る演歌を聞き、「祭り」か、「運動会」か、はたまた、「大売り出し」かと推理しあって、おしゃべり三昧。

行程の最後に、羽黒三田神社手前でトンネル隧道跡を覗き、“おくたまむかしみち”の歩きを無事終える。氷川／奥多摩駅は、直ぐの距離。

かくして、“むかしみち”踏破も、残るは、行程後半1／3の桃ヶ沢～奥多摩湖／水根間のみ。これまでに比し、若干、アップ・ダウンが急なるも、我らが脚力に、何の不都合もなし！

御岳駅も人盛況。

16：00PM 近くの遅い時間にも拘わらず、なお山に向かう人が多く、西東京バスの親父さん、臨時バスの捌きに緊張の連続も、つい笑みこぼすは正直者。

山上、ケーブル御岳山駅も同様で、下る人の待ち行列が御岳平迄溢れ出る。

急がぬ我等は、宿入りする前に一服と、空一転し霰降る中、御岳平で、お湯を沸かして、コーヒー、紅茶でしばしの休憩。

頭上の花棚、「大藤の花」に、“枯れていては、頭の保護にもならぬでないか”と叱るは、お門違いと失笑あるか。

宿は今宵も、「登奈利荘」。

“旨い！”、“旨い！”を連発し、“満腹！”、“満腹！”、と、お腹出し、「カラオケ」が鳴って、大賑わいの大笑い。

同宿の写真家？／関口氏は朝が早いのでと女将に諫められ、宴を切り上げ部屋に戻って、また痛飲。女将が差し入れの二合冷酒も足りず、いざや出番と、非常用気付け薬も出動する。

全員揃っての夜更かしは珍しく、終わり知らずの楽しい二次会、ワイワイ、ガヤガヤ、呂律の怪しい会話は果てしなし。

夜更けた山宿に静寂が戻り、硝子戸を引き窓外の冷気を汲む。漆黒の闇向こうに都心の灯が明るく、空には満天の星。明日の快晴は違い無し。

翌朝は、驚くばかりの空澄み渡る快晴日。

都心の高層ビルはおろか、茨城／筑波山まで明瞭な山容見せ、既に一汗かいた米本氏が、“今朝の、「日の出山」からの「日の出」は最高、「富士山」も明瞭な眺望！”と話す声にも、高揚気味の響き有り。

昨夕方の「霰」を思いだしながら、“強風に限らず、霰でも”と理解し、両方併せて、“なるほど、なるほど”と肯き返す。

朝食には、昨タリクエストの「御岳大根の煮物」が添えられ、またまた美味と舌鼓。

・える辛みの「もろみ」は奥多摩入手も、もう1種の「もろみ」は自家製の由。我らの、「旨い、旨い」の連発に、ついほだされたか、女将が大奮発、土産用にと後者のお裾分けを全員頂戴する、感謝、感謝！

【余談21】最近、武蔵御獄の國、「御獄神社」の境内に高札が立った由。

曰く、“「隣近所荘」の女将が申し立てるには、春秋一度、宿を利用する客人の中に、講名、「烏森会」とか称す集団が居ると云い、

「人品卑しからずも、些細なことに感嘆し、なんでもかんでも褒め讃える。私も、ついその気になり奉仕に精出してしまいが、送り出した後、どうにも勘定が合わないばかりか、大変な持ち出しに気付く」、

と言う悪質なもので、「褒め殺し」の術かとも思われる。

また、「烏」と名乗るも、毛色は半ば白髪にて、むしろ古狸の風とも聞かれ、いよいよ怪しい。

皆も、くれぐれも注意の上、それらしき者を見掛けし折りは、木の葉一枚を軒下に吊すなり、門前に塩を盛る等によりその正体を見破り、くれぐれもたぶらかされることのないよう注意すべし。”

神社官長

その横の『落書き』 “それにしては、女将の羽振り、中々では？”

長尾平は、山麓よりも黄葉、紅葉が進み、秋色一色。

真っ青な空には雲一つなく、風も吹かない小春日和下、柔らかな陽を受け微睡みを楽しむ。

やがて、ヘリコプターの飛来が心地良い安息を邪魔するが、これも餌食と、早速に望遠鏡を取り出し、“事故発生による救援機”とか、“あのマークは報道機関のもの”、更には、“演習機”と諸説紛々に飛行目的を忖度し、しばし談笑、時を遣る。

(正解は、長尾平に新設されたヘリポートを利用しての、東京都消防庁による飛行訓練と落ち着く。)

長尾平から大塚山に回り、明るい登山道に、つい肺を広げて大きく深呼吸。

舞い散る木の葉が樹間を駆け巡るも、なお緑の勝つ紅葉前で、踏みしめる黒土の道に落葉の重なりは薄い。

先を歩く母娘連れに山頂への道を訊ねられ、笑顔で答えてライバル心を奮い立てるが、何と少女の元気なこと、ホイホイと駆け登る！

山頂木テーブルを確保し、「握り飯」と「味噌汁」で、早目の昼食。昨夜からのことを談

議し、次回を語る。

御岳平の売店で、「もろみ」を探す。おばちゃんがサービスする「昆布茶」は、中々の味。
「御岳山」、本日も好日にて、人盛況なり。